

伝達動詞の歴史的現在

日英語の対照研究

松村瑞子

1 はじめに

日本語の会話中の歴史的現在には主語の人称による制限があり、1人称の場合は殆ど歴史的現在にならない。それに対して、英語では1人称でも歴史的現在となることがあり、一見すると人称制限はない。しかし、実際の会話では英語でも1人称では歴史的現在はあまり多くは出てこない。日英語の歴史的現在の人称制限は同じ原則から起こるのだろうか。また英語では主語と伝達動詞が繰り返し表現されるのに対して、日本語では伝達動詞や時制の区別のない形式、引用符のみの引用が多く見られる。これと人称は関係しているのだろうか。

2 問題の所在

歴史的現在とは過去を指すのに現在時制が用いられる用法のことである。Leech(1971:10-11)は、歴史的現在には、[1]庶民的な口語の語りに典型的に用いられる用法と[2]伝達動詞と共に用いられる伝達行為自体は過去に起こったものだが伝達内容はそれを受け取った時点にも効力を持つため用いられる用法が存在するという。

[1] (1) Last week I'm in the sitting room with my wife, when this chap next door staggers past and in a drunken fit throws a brick through out window.

[2] (2) Joan tells me you're getting a new car.

実際の会話では、[1]のタイプと[2]のタイプが混在して起こるため複雑である。Wolfson(1979)は膨大なデータを用いて会話中の歴史的現在の分析をしたが、35%を占めるとする伝達動詞の歴史的現在については説明を諦めている。Johnstone(1987)は、権威の有無に差がある対話者間の会話における say/said の交替について分析し、過去時制は非権威者の発話に権威者の発話には歴史的現在や伝達部無が用いられるとしたが、彼女の挙げた例における3人称では said / say が交替しているが1人称では殆ど said が用いられているということを見ると、人称と関連させた説明が求められる。山口(2009)は、英語の話法では間接か直接の形式的引用が明確であるのに対して、日本語の話法では明瞭な形式的対立に基づく体系性はないが、基本形式が引用句に対して多種の接続パターンを持ち、豊富なニュアンスを伝えると述べた。会話中の時制交替については多くの研究があるが、伝達動詞の歴史的現在に焦点をあてたものは少ない。本発表ではコーパスデータを用いて伝達動詞の歴史的現在と主語の人称の関わりについて考察する。

3 英語伝達動詞の歴史的現在と主語の人称

先ず、Santa Barbara Corpus of Spoken American English の Part1 と Part2 中の全 30 会話を基に、英語の伝達動詞の歴史的現在と主語の人称について量的分析を行った。表1は、伝達動詞 say/go と主語の人称との共起関係を表にしたものである。人称に関わらず過去形が圧倒的に多い、2人称では歴史的現在は1例のみである、1人称では現在形は過去形の10%にも満たないが3人称では現在形は過去形の40%程度を占めている、ということが分かる。

表1：英語の伝達動詞の時制と主語の人称

	1人称	2人称	3人称	合計
過去形 said	92	12	157	261
歴史的現在形 says / goes	3	0	58	61
歴史的現在形 say / go	6	1	5	12
合計	101	13	220	334

更に、会話を詳細に分析していった結果、2人称の過去形では過去に行われた聞き手の発話の確認が多く、唯一確認された歴史的現在形はLeechの[2]のタイプであった。1人称の歴史的現在のうち5例は[1]のタイプだが同一人物の発話のみに見られ、他は現在形で言いかけたことを過去形で言い直すもの等であった。また、"I say"という表現は現在の発話と解釈され過去の発話と解釈することは難しいためか、タイプ[2]は見出されなかった。また、1人称と3人称の伝達動詞で時制交替が起こる時は1人称過去形、3人称現在形であった。3人称では[1][2]のタイプの歴史的現在が見つかった。英語についても、歴史的現在の使用には、明らかに人称による相違が存在するのである。

4 日本語伝達動詞の歴史的現在と主語の人称

日本語については『談話資料 日常生活のことば』のデータ中の 30 会話を調査した。表 2 の結果より、過去形と時制非明示形が最も多く用いられており、更に 3 人称では時制非明示の形式（時制非明示＋伝達動詞無：79 例）が時制明示の形式（過去形＋現在形：56 例）よりも多く用いられていた。2 人称の例は非常に少なく、その多くは過去形で現在形はゼロだった。1 人称については現在形がゼロ、過去形と時制非明示の引用が略同数、伝達動詞無で引用符のみ又はゼロ引用が 12 例見つかった。更に、1 人称については受動態の形式が伝達動詞有の約半数を占めていた。

表 2：日本語の伝達動詞の有無と時制および主語の人称

主語の 人称	伝達動詞有			伝達動詞無	合計
	過去形	現在形	時制非明示 (テ形等)	って、みたいな、 ∅ (引用符無) 等	
1 人称	言った 20 言われた 21	0	言って 20 言われて 22	12	95
2 人称	12	0	2	1	15
3 人称	36	20	43	36	135
合計	89	20	87	49	245

3 人称主語については、全ての形式が用いられ話し手の引用内容に対する様々の態度を表していた。2 人称主語については引用自体が少なく、引用する場合は過去形が殆どであった。過去形での引用の殆どは、聞き手の過去の発話を確認する場合であった。また Leech の[2]のタイプの現在形もなかった。1 人称についても現在形はゼロであった。現在形は他人の発話に対する発話者の印象を表してしまい他人事のようになるためである。更に、過去形・時制非明示のほぼ半数である 21 例・22 例が受動態の形式であった。日本語の受動態には直接受身と間接受身（迷惑受身）があるということが知られているが、日本語 1 人称の伝達動詞有引用の略半数がこの迷惑受身として現れ、相手の発話内容によって話し手が精神的影響を受けたことが表現されている。日本語の引用については、様々の表現形式で発話を引用して、話し手の発話に対する態度を表現していることが分かる。

5 おわりに

英語については、略 80%が過去形で語られていること、実際には過去に発話された発話であっても現在まで通じると話し手が判断する場合には歴史的現在形を用いることがあることを考え合わせると、英語は「発話時基準」が非常に強い言語であると言える。一方、日本語については、過去における発話引用であるにも拘らず過去形はわずか 36%であったこと、時制非明示と伝達動詞無の引用を合わせると全体の半数以上であったことを考えると、日本語は「発話時基準」が緩い言語であると言える。また、1 人称については日本語も英語も歴史的現在が少ないのは、発話者自身の過去の発話は過去形で明示しなければ、実際に起こった発話とは解釈されにくいためである。英語においては、1 人称の発話も歴史的現在で描写することも稀にはあるが、時制交替する場合は殆ど、3 人称の発話を現在形で 1 人称の発話を過去形で表現する。一方日本語においては、英語と同様の理由に加え、1 人称の発話を現在形で引用すると他人の発話に対する発話者の態度を表してしまうため、現在形が用いられた 1 人称主語はゼロであった。この結果と、1 人称主語では受動態「言われた」「言われて」が半数を占めていたということには繋がりがあがる。受動態の「言われた」の場合も他人の発話によって発話者が影響を受けるということを表す。これらを考え合わせると、英語では発話時を基準とした客観的な引用、日本語では発話者を基準とした発話者中心の主観的な引用と考えられる。

参考文献

- Johnstone, Barbara. 1987. "‘He says ... so I said’: verb tense alternation and narrative depictions of authority in American English," *Linguistics* 25, 33-52.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Wolfson, Nessa. 1979. "The conversational historical present alternation," *Language* 55(1), 168-182.
- 山口治彦. 2009. 『明晰な引用、しなやかな引用』 東京：くろしお出版.
- 英語資料：Santa Barbara Corpus of Spoken American English
<http://www.linguistics.ucsb.edu/research/santa-barbara-corpus#SBC001>
- 日本語資料：現代日本語研究会 遠藤織枝他編. 2016. 『談話資料 日常生活のことば』 東京：ひつじ書房.